



上智大学ソフィア会 ソフィア文化芸術ネットワーク 会長
大久保 正雄 氏

世界遺産アカデミー会報誌 2011年春月号第11号
2011年4月15日発行

——イタリア・ルネサンスの美

世界遺産の宝庫イタリアは、美の王国である。私をはじめ旅した世界遺産はイタリアである。美術史のなかで燦然と輝くイタリア・ルネサンスとギリシア(※)美術に少年の日から魅せられてきた。イタリア・ルネサンスの美に魅せられてフィレンツェを旅した。フィレンツェは15世紀の都市が五百年の時を超えて変わらぬ姿で今に残っている。夕日を浴びて佇むサンタマリア・デル・フィオーレ。紫の黄昏に暮れていくポンテ・ヴェッキオは限りなく美しい。ルネサンスの世界がそのまま残っていることに感動する。イタリアはいつ行っても懐かしい郷愁に誘われる。いつまでもそこに佇み眺めていたい風景がある。

——イタリア・ルネサンスの藝術家たち

ボッティチェリ「ヴィーナスの誕生」「春」、レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」「三博士の礼拝」、ミケランジェロ「ピエタ」。ルネサンス藝術の美しさに魅了されてイタリアの地を踏む人は跡を絶たない。ルネサンスの語源はジョルジョ・ヴァザーリ『藝術家列伝』に出てくる「リナシタ」(再生)である。ジョットからミケランジェロにいたる藝術家たちによる古代藝術の復興を指した。だがジョットと比較すると、ボッティチェリやレオナルド・ダ・ヴィンチら盛期ルネサンスの絵画は格段に生彩を放っている。盛期ルネサンスの画家たちの絵画は、遠近法、写実的表現そして古典的均整と激情の美を湛えている。では復興した古代の文化とは何か。

——ギリシアに魅せられたローマ皇帝たち

古代ローマの皇帝ネロ(54-68)や皇帝ハドリアヌスは、ギリシア文化を愛した。ネロはギリシア彫刻を愛しコレクションを所蔵していた。ネロはギリシア彫刻を集め宮殿に並べていた。古代彫刻の数々の傑作「ラオ

コーン」「エスクイリーノのヴィーナス」「ベルヴェデーレのアポロン」は、ネロのコレクションのなかにあつたと推定される。ネロはパラティヌスの丘からカピトリヌスの丘まで「渡り宮殿」(ドムス・トランシトリア)を建設したが、ローマが大火で炎上し、廢墟の跡に「黄金宮殿」(ドムス・アウレア)を建設した。エスクイリヌスの丘は、黄金宮殿の跡である。「ベルヴェデーレのアポロン」は、アンティウムのネロの夏の離宮から発見され「エスクイリーノのヴィーナス」はエスクイリーノの丘から発見された。ネロは美を追求した。美に溺れ、美的趣味を追求した詩人皇帝である。皇帝ハドリアヌスは五賢帝の一人で多くの建築を建てた。自ら設計した建築家皇帝であるといわれる。「パンテオン」「ヴィラ・アドリアーナ」、アテネの「ゼウス・オリュンピエイオス神殿」「ハドリアヌス門」「百柱の図書館」が有名である。ハドリアヌスのギリシア風に髭を生やした彫像は気品がある。

——地中海の図像学、よみがえる古代ギリシアの美

ローマの大理石の彫刻はギリシア彫刻のローマ時代のコピーであるが、古代ギリシア文化の香りを伝える貴重な文化遺産である。地中海の美術は、ギリシア神話と哲学のモチーフに彩られている。ギリシア悲劇や古代ローマの詩人オウィディウス『変身物語』に書かれた魅力的な物語は、古代からルネサンスを経て現代に至るまで藝術家たちの心の発想の源泉であり続けている。「オルペウスとエウリュディケ」「オルペウスの死」は『変身物語』十巻、十一巻が典拠である。エロスについての「哲学の奥義」がプラトン『饗宴』に詳細に議論されている。ディオニュソス(バックス)はエウリピデス『バックスの信女』が重要な原典である。愛と魂の象徴である「エロスとプシューケー」の悲恋と苦難の果ての愛の成就の物語はヘレニズム期のアプレイウス『黄金の驢馬』が原典である。

ヴァチカン宮殿ベルヴェデーレの中庭にある「ラオコーン」は、紀元前3～2世紀ロドス島の三人の彫刻家ハゲサンドロス、ポリュドロス、アタノドロスによ

てリンドスの工房で作られた。ティトゥス帝(79-81)の宮殿に置かれていたと伝えられるが、ネロ帝の宮殿の遺産であると思われる。ペルガモン王国のために作られローマ人によってローマに運ばれた、ヘレニズム彫刻の傑作である。ラオコーン像は、ルネサンス時代1506年1月14日、エスキリーノの丘から発見された。ミケランジェロはこの作品を見て靈感を受けた。同じ作品を作るように頼まれたミケランジェロは「私にはできない」と言ったという伝説がある。ヘレニズム彫刻の激情表現はバロックの要素をもつミケランジェロに深い共感呼び起こした。13世紀、トマス・アクィナスはギヨーム・ド・メルベケ訳アリストテレスを読み『神学大全』を書いた。

——メディチ家とプラトン・アカデミー

15世紀に蘇った哲学はプラトン哲学である。1439年7月6日フィレンツェ公会議で、コジモ・デ・メディチはギリシア人哲学者プラトンの講義をきき、プラトン哲学の奥義に感銘をうけ、「アカデミア・プラトニカ」(プラトン・アカデミー)を構想した。コジモ・デ・メディチは、1462年マルシリオ・フィチーノにプラトンの原典とカレッジの別荘を与え、プラトン全集の翻訳を依頼した。コジモは1464年に死ぬ。しかしフィチーノは1477年に完成した。ロレンツォ・デ・メディチは1492年死に、プラトン・アカデミーの思想家たちは、1498年までに次々と死ぬが、フィレンツェから始まったルネサンスはヨーロッパ文化史に深い影響を与えた。(cf.清水純一『ルネサンス 人と思想』、イヴァン・クルーラス『ロレンツォ豪華王 ルネサンスのフィレンツェ』)

アカデミア・プラトニカは「美しい精神をもつ人々の自由な集まり、プラトンに捧げられた集まり」である。(cf.アンドレ・シャステル『ルネサンス精神の深層—フィチーノと芸術—』)フィレンツェ・プラトン主義の愛と美の哲学はミケランジェロたちルネサンスのアーティストに影響を与えた。「魂の美は、肉体における美より美しい」「魂の眼は肉眼が老いる時やと輝き始める」(プラトン『饗宴』)

——視覚美から内面の美、見える美から魂の美へ

ボッティチェリの愁いを帯びたヴィーナスの美、ミケランジェロのダヴィデの凋落を必至とする肉体の青春の輝きの美、ピエタの時のなかで移ろい行く一瞬の肉体の美と悲しみ、レオナルドの天使の瞬間の表情の中に現れる魂の美。ルネサンスのアーティストたちは「藝術によって思想を表現した」(ケネス・クラーク)。ギリシアからローマ帝国、ルネサンス・イタリアからフランスの古典主義へ、ロマン主義そして象徴主義へ。古典主義と反古典主義の対立と葛藤を反復し、うねりながら象徴的形象と内面の美の探求の歴史は現代にまで及んでいる。フランソワ・ジュラール「エロスと

プシューケー」(ルーヴル美術館)はその結晶である。ルネサンス藝術は、地中海のもうひとつの知恵の源泉であるキリスト教とギリシア精神の融合である。ルネサンス藝術には魔術的世界観がある。レオナルド「岩窟の聖母」(ルーヴル美術館)はマリアとイエスとヨハネの図像による愛と生命の神秘の象徴学である。

——世界遺産の都市の美

ヴェネツィアをはじめて訪れた時、黄昏に金色に輝くサン・マルコ寺院の円蓋の彼方にイスタンブールの聖ソフィア寺院を夢みた。イスタンブールからさらにアクロポリスの丘に建つパルテノンをたずねて旅に出た。パルテノン神殿には帝国と戦う自由の精神が刻まれている。秀麗な花の聖母教会、ラヴェンナのサン・ヴァイターレ教会の不思議な世界、荘厳なサンピエトロ寺院、時を超えて生きてきた優れた建築にはあらゆる時代の人類の叡智が注ぎ込まれている。千年の時の流れを超えて生きた都市は、その空間自体が藝術である。水の迷宮都市ヴェネツィア、ルネサンス都市フィレンツェ、バロックの劇場都市ローマ。見える藝術の美から見えざる魂の美へ。世界遺産の都市への旅は、時を遡って人類の知恵を探求する精神の旅である。

——世界の果てでみつけた美しい謎

偉大な都市の片隅に、美しい謎がある。ギリシア、テッサロニキ考古学博物館の「デルヴェニのクラテル」には「ディオニュソスとアリアドネの結婚」が刻まれて、比類なく美しい。スペイン、コルドバのメスキータの林立する列柱室は、美しい闇である。アクロポリス考古学博物館「アクロポリスの少女(コレイ)」のアルカイックな微笑みは、何故かくも美しいのか。旅立とう。世界の果てに、美しい謎を求めて。

【編集注】

※上智大学の表記に準じる。

【Personal Information】

上智大学ソフィア会ソフィア文化芸術ネットワーク 会長

大久保 正雄(Masao OOKUBO)氏

著述業。講師。専門は、哲学、美学、地中海、美術評論。上智大学大学院修了。北海道大学大学院博士後期課程単位修得。

著書『ことばによる戦いの歴史としての哲学史』理想社。「プラトン対話篇における美の探求」(上智大学哲学論集)、「美の奥義 プラトン哲学におけるエロス(愛)とタナトス(死)」、「ギリシア悲劇とプラトン哲学の迷宮」、「プラトン哲学と空海の密教」、「幻の花の都、京都」、「不死鳥の画家、北斎」、「メディチ家とプラトン・アカデミー」他論文多数。

Web『地中海のほとりにて』

<http://mediterranean.cocolog-nifty.com/blog/>

『旅する哲学者 美への旅』

<http://platonacademy.cocolog-nifty.com/blog/>

『地中海紀行 旅する哲学者 美への旅』

<http://odyssey2000.cocolog-nifty.com/blog/>